

子どもたちが英語を読む力を獲得するために

～ぼーぐなん教材で可能な文字指導～ 久埜 百合

はじめに

日本中全ての小学校で、子どもたちに英語と出合わせることが常識となりました。高学年からではありますが2012年度から必修化され、文部科学省からテキスト“Hi, friends!”が配布され、週1回「英語活動」という授業が行われています。総合的な学習の時間のときから英語活動が入り始めたので、私立小学校だけでなく、相当数の公立小学校が低・中学年でも英語活動を続けているところがあり、地域間・学校間で格差が生じていることも事実です。

時代が明治に移る前から子どもたちに外国語を教えた記録はありますし、明治時代になってから小学校教育課程で英語を教科として教えてきた歴史も古く、今回の小学校英語導入開始は全く素手で始めたわけではないので、いろいろな人がいろいろな考えでカリキュラムを作り授業をデザインしている、というのが現状です。

特に、第2次世界大戦後、新たな英語ブームの波が何回も押し寄せ、早期英語、幼児英語、児童英語などと名前を冠して、中学進学以前に行う英語教育の指導方法については様々な提案が行われ、教材も数えきれないくらい開発されてきました。その中には、文字指導に大変力を入れ、読む力をつけようとしたものもあります。しかし、1970年代、小学校段階の英語教育では文字を扱うな、という強い意見が支配して

いたこともあり、文字指導については専門家や実践家の間でもそれぞれの方法で進めるという傾向があり、子どもの英語習得に占める文字の役割について、相互の立場からの議論はあまり深まらないまま、既成事実として文字指導が必要とされるようになりました。なぜ文字指導についてあれほど強い慎重論があったのかを振り返ることなく、文字指導が広く取り上げられ始めています。

必修化された 2012 年から全国津々浦々の小学校で英語を教え始めることが常識となった、という事実は大きな意味を持っています。そして、文部科学省発行のテキスト『英語ノート』や『Hi, friends!』でアルファベット文字の指導のレッスンが入ってきたことで、文字指導は新しい段階に入ったと言えます。ところが、中学までに英語の何ができるようになっていけばよいのか、ということがあまり明確に示されておらず、上記テキストで示されていることが必ずしも子どもの外国語学習能力と合致していないために、小学校の先生方は指導内容を選択されるときに戸惑いを感じておられると思います。

子どもたちは日常生活の中で英語の文字と触れ合っており、外来語として英語の語彙も蓄えているので、その子どもたちの中に秘められている外国語学習能力を掘り起こして、文字指導に関連した指導内容についても検討を加え、指導技術を磨いていきたいと思っています。

I. 新しいことばを獲得していく子どもたち

子どもの外国語習得の過程で、どのように文字に辿り着き、さらに文字を支えとして、その言語の運用能力を伸ばしていくのでしょうか。殊に、日本語が特段に優位である社会で生活しながら、表記法・音声・文法のどれをとっても距離のある言語を学習する中で、子どもが新しい言語をどのように習得していくのか、4 技能の視点で考えてみましょう。

聞く力 (Listening)

- ・子どもが蓄えている外来語で、英語にもなっているものを主に内容語として活用し、「聞いて分かる」経験をさせる
- ・聞いて分かる成功体験を重ねて、「聞き続ける力」を養う
- ・聞いて情報を処理し、自分なりに対応しようとする力を養う
- ・聞く力を伸ばすための効果的な活動

指導者が子どもの理解しやすい英語で話しかけ、問いかける
短くて理解しやすいお話を聞かせたり、絵本の読み聞かせをする
歌やラ임을聞かせて、真似をしたくなるように促す

話す力 (Speaking)

- ・指導者のサポートを得て、聞いて理解した内容に応答しようとする“話す”力を養う
- ・自ら情報を伝達したいと思って“話そうとする”力を養う
- ・指導者のサポートを得て、文字(単語・句・文・複数の文)を見ながら音読する力を養う。
- ・指導者のサポートを得て、歌ったり、ラ임을となえたりする

読む力(Reading)

- ・ アルファベット大文字・小文字の形状認識と文字名の音の認識
- ・ アルファベット文字個々のもつ音についての認識
- ・ 発音できるようになった単語の綴りを見て、文字の組み合わせのルールに気づく
- ・ 言えるようになった句・単文を読もうとする
- ・ 聞きとって理解し、口頭で応答できる単語や句や文が文字化されているものを見ながら、聞き取るスピードで追いかける
- ・ 数個以上の文を読んでもらったときに、文字列を目で追いながら、既知の単語を拾い読みする、
- ・ 唱えたり歌ったりできるようになった歌詞が読める

書く力(Writing)

- ・ アルファベット文字をお手本を見ながら書写する
次第に一人でも書けるようになる
- ・ お手本を見ながら、自分の名前・住所などを書き、
一人でも書けるようになる
- ・ お手本を参考にして、誕生日カードなどを書く
- ・ お手本を参考にして、自分が伝えたいことを文字化して伝える
ために必要な綴りを既習の教材(Action テキスト・WORD BOOK
など) や辞書の中から自発的に探し出しながら、単語や句、そして、
短い文を書こうとする。初めは綴りや語法の間違いが起こるが、
しばらくは厳しく訂正を求めることを避け、見守っている方がよい。
書写の作業を多くすると、子どもは書くことを楽しめない。
子どもの習熟度を見極めて、適量の作業を与えると、次第に
独り立ちして書けるようになっていく。

II. 子どもの学習プロセスにおける 4 技能の相互作用

「聞くこと」によって英語の音声の基盤ができます。その音声の基盤に立って、「話そうとする力」「読み続けて理解を深めようとする力」「書いて記録し、または、伝えようとする力」のすべてが育まれていきます。「聞いてインプットされる音声」が不十分であったり、“英語らしい音の流れ”から外れていたりすると、これら 3 つの技能を伸ばすことが難しく、学習者は途中で躓きますので、なるべく早い時期、例えば中学英語の指導中に修正する必要が出てきます。

子どもたちに英語を言わせようとして、その英単語や英文を繰り返し「聞かせて」練習させ、真似をして言えるようになったことを「話せるようになった」と評価し、「コミュニケーション能力の素地を育成した」とすることはできません。前もって決めておいた英語表現を聞かせたり言わせたりする活動は「コミュニケーション」とは言えないのではないのでしょうか。また、「コミュニケーション能力」を“会話能力”と捉えがちですが、コミュニケーションを成功させる能力は、やはり「聞く・話す・読む・書く」という 4 技能を含むものと考えます。

さらにアルファベットの文字を一つずつ見せて、その名前と形状を認識させ、その 26 文字の順序を知ることは、指導の初期段階では意味がありますが、「文字が読めること」とはつながりません。文字の形状を書写することや、指示された単語や句や短い文を「書

くこと」も文字による伝達能力とは違います。単語を綴るために使われている文字のルールを教えること、すなわち、フォニックスのルールを教えることも、シラブルを分析的に見分けてその音を理解することにはつながりますが、英文を読みこなし、正しいリズムと声調で表現する能力を伸ばすことには、直接にはつながらないということも覚えておきたいことです。

このように、常にモデルを示してそれをなぞって「聞いた通りに話し」「見せられたものを音読して書写する」指導方法を続けると、お手本が与えられなければ、英語を生きた“ことば”として運用できるようにはなれません。自分の力で英語を使ってみよう、というより、教えられた範囲で行動する、いわゆる“指示待ち人間”が英語の授業でも生まれてしまいます。

このような指導方法では、一見子どもたちがにぎやかに英語を使っているように見え、楽しそうに英語を書いているかに思えますが、実は、指導者の話しかける英語を暗記して言う、そして、絵をなぞるように文字を写し書きするだけで、自分の考えを口頭で伝え、自分の伝えたいことを文字化する力をつけるとは言えないのです。子どもが自分の力で考えて、心の中にある思いを伝える、という本来のコミュニケーションを経験するためには、発達段階に応じた子どもの持っている知識と思いが反映されている内容を表現する活動が必要です。つまり、「聞き」「話し」「読み」「書く」活動の根っこに、子どもが「考えている」ことが必要なのです。

文字に辿り着き、単語を読み、文の意味を納得し、単語を書いて答え、未熟であろうとも文を書いて表現できるようになる、「文字による表現活動」への指導も、子どもが「考えていること」が基本になっていることを忘れてたくないものです。

子どもが文字を支えにして英語で表現する力を伸ばしていく過程において、これらの「4技能+考える力」が、どのように絡みあって獲得されていくのか、考えてみたいと思います。

◆「聞く力」を伸ばすと「話す力」も伸びる

子どもたちは、英語を聞いてその内容を即座に類推する素晴らしい力持っています。どうしてそのようなことができるのでしょうか。子どもたちの生活に密着した内容を取り上げて、子どもたちの生活語彙の中にあるカタカナ語を使って話しかけているからです。彼らが蓄えている語彙量は、私たちの想像以上に大きく、それを手掛かりに類推していくからです。それから、もう一つ、9歳くらいまでの子どもたちは、自分が類推したことが全くの見当はずれでも、心にそれほどのダメージを受けず、ケロッとしている、という点も見逃してはなりません。そして、その見当はずれを、上手に指導者が補って軌道修正をすれば、初めから分かっていたような気分で英語の世界にとどまっています。

10歳を超えるころからは、周囲の目を気にしはじめ、勘が働かなかったことを“間違えた”と思い、恥ずかしがったりするので、指導には心配りが必要になります。指導を開始した直後から、英語

は間違えながら使いこなしていても大丈夫、間違いもまた楽し！という場面を作って、子どもたちの心を開放し、積極的に英語を使いあうことに慣れさせていくことが、重要な指導のポイントとなります。

子どもが日常的に母語の中で聞き、理解し、蓄えている外来語の数は 1500 前後と考えられます。小学校入学前後の子どもたちでも、動物園の俯瞰図を見せて、聞こえた動物にタッチするように指示をすると、lion, tiger, kangaroo, panda, penguin, flamingo, gorilla, chimpanzee, monkey, koala と迷わず触っていきます。食べ物や衣服、乗り物や楽器などでも同じことが起こります。

輸入食品の種類増加、新しいスポーツの導入、電子機器の普及などが、日常生活に大きなインパクトを与えており、それに伴って、外来語の種類も急増しています。例えば、コンピュータをはじめとする IT 関係の語彙やブリッジやタワーのような建築物の単語などは、もはや英語というより日本語です。馴染みのある投手の球種が増えるたびにカタカナ語が増える、というように、子どもの生活の中にカタカナ語が驚くほどのスピードで増えています。外来語を取り入れて英語で話しかければ、すぐに内容を類推し、「分かった！」という表情を見せます。その時に、答えやすいような文で質問をすれば、即座に知っている単語を使って元気よく応じます。思い違いや未熟さのために答えが外れることもありますが、指導者が正しく言い直して聞かせると、思わず訂正して言い直そうとします。そして意味を伝えあうことに成功した喜びが表情に現れます。

◆自力で“伝える”ことに成功すると、「話す力」が伸びる

簡単な語彙の確認をする Q&A から進んで、絵本の読み聞かせや、指導者の語りかけによって音声で情報を得ることに慣れてくると、自らも伝えようとする意欲が湧いてきます。伝えようとしても音声のリズムや抑揚がうまくいかず、英語そのものも未熟であっても、伝えたい気持ちが強くなると、思わず口をついて英語が出てくるようになります。相手に情報が伝わった実感を得られれば、その成功体験が次の発話への勇気につながるので、繰り返していくうちに次第に伝えられる量も増え、自信がでてきますし、英語らしい音声も確かなものになっていきます。

初めは、顔の表情や身振りだけだったものが、母語混じりの単語になり、母語が消えて英語だけになり、主語も動詞もある文で伝える段階に移行していくのに、あまり時間はかかりません。聞こえてくる英語や、自分が口頭で言いたい内容に近いことが文字化されていると、聞きながら、そして、答えながら、いつの間にか文字を読むようになります。並んでいる文字が目に入ると、その中のどこを自分が表現したい単語と入れ替えればいいのか分かり、英語で表現する自信が増してきます。

◆英語を「聞き」「話す」ことに慣れた時に見せる子どもの力

① 「音調」を聞き分けるようになる

英語学習の初期の頃、あいさつをしたり、名乗ったり、持ち物や

好みについて話したり、そして体を動かしながら歌ったりゲームをしたりする活動が授業の大半を占めます。こうして英語のリズムや音調に慣れてくると、口頭で表現活動するときも、“英語らしさ”に気を付けようとしています。そして、モデルとして聞かされる英語と友だちが話す英語の音との違いにも気が付くようになります。そして、日本語にはない /f/, /v/ や /s/, /th/ の違いに気づいたり、/wh/ の音で始まる **whale** や **white** が日本語の /ホ/ と違うことに戸惑いながらも、何とかしてその音を出そうとしています。

② 英語の言葉の仕組み(文法)に気づくようになる

口頭による表現活動に自信をつけたころ、ちらちらと文字の塊を目にして、それを支えに自分なりの情報伝達の手段を獲得していきます。そのころ、音の流れの違いに一定のルールがあるらしい、と気づくようになります。主語が変わると次の動詞の音が変わる、一つのことを言っているときと、いくつかある時では、何かが違う、文や単語の終わりに /s/, /z/, /ts/ の音が付くことがある、場所を言うときに **in** や **on** の次に言いたいものの名前との間に短い音(**the**)があるらしい、などと考えている様子が見えます。

③ 表現する例が文字化されていると、自然と読もうとする

文字化されているものを音声でなぞる「音読」が容易にできるようになってきます。そうすると、声を出して読み上げる回数を重ねていくうちに、並んでいる文字の塊の順序の中にある規則性を見つけ出し、英文の仕組み(文法)への気づきが倍加していきます。

◆文字を見ながら口頭表現することで「読む力」を伸ばし、「書く」
ことにつなげる

指導者の話す英語や視聴覚教材をモデルにして英語の詩やお話を朗唱することができるようになると、自力で読もうとし、自分の気持ちを伝えようとし、それを記録しようとしています。このような力をつけることが、高学年の英語指導で是非到達したい指導目標です。

Ⅲ. ぼーぐなん教材の目指す 4 技能

Wonderland Series から始めて、*Action Series* に入り、4冊を終える 12 歳までに、4 技能をどこまで伸ばすことができるか、教材を具体的に取り上げて考えてみましょう。

特に、ぼーぐなん教材が提案している指導順序で文字認識を促進し、「読む力」を育てることがどこまでできるかに焦点を当てたいと思います。

- ① 指導開始の当初から、英語で話しかけるきっかけを作りやすく、英語の音声に慣れさせるアクティビティを行いやすい教材

ジグソー・パズル、

カード類 ABC カード

 BINGO カード

 Matching カード

 Counting カード

ワークシート

② ***Welcome to Wonderland* (Red Book) 1 年生**

***Welcome to Wonderland* (Blue Book) 2 年生**

着せ替えシール＝Red Book & Blue Book の見開きページを

使って英語のやり取りができる付属の教材

語彙を増やしながら、馴染みのあるお話などを聞いて、英語によるインタラクションに慣れるとともに歌やライムを楽しむ

③ **大型ポスター**

ジグソー・パズル (大文字)

探せるかな (Red Book pp.1-2 大文字)

アルファベット(Green Book pp.2-3 小文字)

④ ***English in Wonderland* (Green Book) 3 年生**

- ・ストーリー性のある内容で英語によるインタラクション
- ・カードやポスター類でゲーム的要素を加えて活動する
- ・歌やライムを楽しむ
- ・テキストで扱っているアルファベットに慣れ親しむ活動

ここまで、ほぼ 1 年生から 3 年生までの間に終了

⑤ **Action 1**

Lesson 1 から Lesson 4 まで

- ・アルファベット 26 文字とその順序に触れさせる
- ・アルファベット各 26 文字で始まる語彙を扱った活動

Lesson 1 から Lesson 10 まで

- ・テキストの英文を目にし、口頭表現の意味が文字で表記されていることに慣れる
- ・英文の構造に気づきやすいように、英文のレイアウトに配慮

してある

- ・ **L.10** までで、簡単な自己紹介ができるようにする
- ・ **Workbook** 各レッスンのページ **B/D** で書くことに慣れていく

⑥ **WORD BOOK**

指導者の英語による語りかけに応じて **WORD BOOK** のページを繰り返しながら単語を探している間に単語の文字を確認する。全ページをデジタル教材化してあるので、指導者が操作する **PC** とプロジェクターを併用すると、同一画面にクラスの全員が注目して活動ができる。

大型ポスターになっているページもある。

⑦ **ABC** の本

- ・ 文字＋音＋英語の綴りのルールを一致させる
- ・ フォニックスのルールに気づかせる

⑧ **Action 2**

- ・ 主語、代名詞とそれに伴う動詞の用例を経験させる
- ・ 早口言葉で 子音文字とその音の大切さに気付かせ、英語の綴りへの意識を高める

⑨ **Action 3**

- ・ さらに語彙を増やし、少しずつ長い文で表現の種類を増やし、複数の文でまとまった情報を得ることに慣れる
- ・ まとまった内容が表記されている複数の文をモデルと一緒に音読することに慣れさせ、一人で英文を読むことに挑戦する

⑩ **Action 4**

- ・ 助動詞を使った表現、過去や将来に起こったことの表現を経験させる

- ・母音に焦点を当てた早口ことばで、母音字とその音の繋がりから英文の綴りのルールに気づかせ、ルールには例外があることにも気付かせる
- ・各レッスンで、数ページを読みつなぐことで、文字情報を得る楽しさを経験させる

IV. 身近にある実物をぼーぐなん教材と併用して活動し、実用的な英語運用能力を伸ばす

各種のぼーぐなん教材を使って活動を続けていると、英語を使って表現することに慣れてきます。この学習能力が伸びる段階に併せて、次のような活動も取り入れ、身に付けた英語の応用力を付けさせ、自信を持ってコミュニケーション活動に参加できるようにしたいものです。

- ①ぼーぐなん教材と併用して、他教科の教科書で使われている文字を読んだり、衣服・文房具・チラシ広告など身近にあるものにアルファベット文字が使われていることに気付かせる
- ②一般向けの素材の中にも“分かる”文字があることを、英字新聞を見せて読める単語を探させるなどして経験させる
- ③発達段階に適した絵本などの読み聞かせをし、自力でも読もうとする気持ちを育てて、多読へ向かわせたい。絵本を選択する際には、子どもの英語の習熟度だけでなく、年齢に応じた発達段階の様子を注意深く見取る必要がある。

『ぼーぐなん教材を使った《文字指導》～文字認識から読解力へ～』

r(receptive)=受動的に聞いて分かる語

p(productive)=能動的に使うとする語

学齢 数字＝語彙数	主な活動	教具	テキスト
幼児期 ----- r300> p 50	指遊び・歌 ゲーム 絵本の読み聞かせ 視聴覚教材の視聴	ワークシート カード ジグソー・パズル Red Book デジタル版 Blue Book デジタル版 絵本 身近にある実物に 印刷された文字	
1年生 ----- r 500> p 50	歌 お話を聞く 体を動かすゲーム カルタ取り 絵本の読み聞かせ 絵本を眺める 視聴覚教材の視聴	ABC カード ジグソーパズル Alphabet を扱って いるワークシート ミニ ABC Book 大型ポスター 着せ替えシール Red Book デジタル版 絵本 身近にある実物に 印刷された文字	Red Book

<p>2年生</p> <hr/> <p>r 500> p 100</p>	<p>ABC カード並べ ワークシートの作業をする カルタ取り 雑誌やチラシ広告などの印刷物の中に、アルファベット文字を探す 絵本の読み聞かせ 体を動かす歌 手遊び歌 ライム 視聴覚教材の視聴</p>	<p>ABC カード ジグソー・パズル ミニ ABC Book Alphabet を扱っているワークシート 大型ポスター 着せ替えシール Blue Book デジタル版 絵本 婦人向け・子供向けの雑誌 チラシ広告など</p>	<p>Blue Book</p>
<p>3年生</p> <hr/> <p>r 600> p 150</p>	<p>ABC カード並べ NHK など並べる ワークシートのミニ ABC Book を作り、アルファベット文字を書写する ゲーム化した歌 ライム お話を聞く 絵本の読み聞かせ 視聴覚教材の視聴</p>	<p>ABC カード・ Bingo カード ワークシート ミニ ABC Book ジグソー・パズル 大型ポスター Green Book デジタル版 絵本 『えいごリアン 2000~2001』</p>	<p>Green Book</p>

<p>4年生</p> <hr/> <p>r1000>p200</p>	<p>ABC の歌 名前など初歩的な 書写 Action 1 テキスト の英語表現に慣 れ、文字化されて いるものにも興味 を持つ。 自己紹介を口頭で 行い、簡単な英文 で書く</p>	<p>A1;Ls.1-4 ABC カード Bingo カード(裏 の英語綴りも活用 する) Matching カード Counting カード</p>	<p>Action 1 Workbook 1 ABC の本 WORD BOOK</p>
<p>5年生</p> <hr/> <p>r2000>p500</p>	<p>知っている単語を 読む 早口言葉を言えたら 書写する テキストの英文を 教師と一緒に読む 4年生で経験した 英文のルールに気 づき、音読をする 辞書使用の手ほど きをする</p>	<p>英字新聞天気予報 英字新聞スポーツ 記事 辞書は電子辞書で はなく、紙媒体の カタカナで発音表 記をしてない英和 辞書を使う</p>	<p>Action 2 L.11～ Action 3 L.26 まで Workbook 2, 3 WORD BOOK</p>

<p>6年生</p> <hr/> <p>r2500>p700</p>	<p>教師がテキストのお話を読むのを聞きながら黙読する</p> <p>テキストのお話を自力で朗読する</p> <p>早口言葉を読んで言う</p> <p>ストーリー性のある、少し長いわらべ歌を朗唱し、その文字化されたものを読む</p> <p>辞書で単語を調べる</p>	<p>英字新聞の興味ある記事</p> <p>マザー・グースのわらべ歌</p> <p>英和辞書</p>	<p>Action 3 L.27~</p> <p>Action 4 L.40</p> <p>Workbook 3, 4</p> <p>WORD BOOK</p>
<p>中学1年生</p> <hr/> <p>r 3000</p> <p>>p 1000</p>			<p>検定教科書</p>